

主 題：信仰者と罪：壊れた関係を修復する5

聖書箇所：コリント人への手紙第二 7章10-11節

テーマ：教会における兄弟姉妹の関係を含め、壊れた関係を修復するためには

今朝、皆さんとともに見ていきたいのはⅡコリント7：10-11のみことばです。

○壊れた関係を修復するための八つの要素：

私たちは今、壊れた関係を修復すること、特にその八つの要素について、パウロのことばから時間をかけて学んでいます。きょうもその続きを一緒に考えていきたいと思います。いつものようにみことばをお読みします。

Ⅱコリント7：5-11

「:5 マケドニヤに着いたとき、私たちの身には少しの安らぎもなく、さまざまの苦しみに会って、外には戦い、うちには恐れがありました。:6 しかし、気落ちした者を慰めてくださる神は、テスが来たことによって、私たちを慰めてくださいました。:7 ただテスが来たことばかりでなく、彼があなたがたから受けた慰めによっても、私たちは慰められたのです。あなたがたが私を慕っていること、嘆き悲しんでいること、また私に対して熱意を持っていてくれることを知らされて、私はますます喜びにあふれました。:8 あの手紙によってあなたがたを悲しませたけれども、私はそれを悔いていません。あの手紙がしばらくの間であったにしろあなたがたを悲しませたのを見て、悔いたけれども、:9 今は喜んでいます。あなたがたが悲しんだからではなく、あなたがたが悲しんで悔い改めたからです。あなたがたは神のみこころに添って悲しんだので、私たちのために何の害も受けなかったのです。:10 神のみこころに添った悲しみは、悔いのない、救いに至る悔い改めを生じさせますが、世の悲しみは死をもたらします。:11 ご覧なさい。神のみこころに添ったその悲しみが、あなたがたのうちに、どれほどの熱心を起こさせたことでしょうか。また、弁明、憤り、恐れ、慕う心、熱意を起こさせ、処罰を断行させたことでしょうか。あの問題について、あなたがたは、自分たちがすべての点で潔白であることを証明したのです。」

1. 慰めを与えてくださる神様 5-6節
2. 準備されていた恵みの態度 6-7節
3. 愛を伴う罪への戒め 8-9節
4. 神様のみこころに添った悲しみ 8-10節

さて、きょうの内容に入っていく前に、先週学んだことを思い返してみてください。私たちは壊れた関係を修復する上で、大切な四つ目の要素、神のみこころに添った悲しみについて考えました。パウロは、悲しみというものには2種類のあるものと私たちに教えてくれていました。一つは神様が望まれる神のみこころに添った悲しみであり、もう一つは神様が望まない世の悲しみと呼ばれるものでした。では、これら二つの間にはどんな違いがあるかと言うと、神のみこころに添った悲しみというのは、自分の罪が聖い神様に対して犯したものであると認めて、そのことを心から悔いる一方で、世の悲しみというのは、罪を犯した自分が恥をかいたり、罪によって生じるあらゆる痛みや結果をもって嘆いているものでした。具体例として見たふたりの人物——ダビデとサウルには、大きな違いがありました。彼らはどうしても同じように罪を犯して、どちらもその罪を戒められていました。どちらも同じく悲しみを覚えていました。しかし、その心に生じた悲しみが神様に目を向けることで生まれたものなのか、それとも自分に目を向けることによって生まれたものなのか、そこに大きな違いがあったのです。ダビデは自分の犯した罪が、ほかのだれでもない聖い神様の御名をどれほど傷つけたのかに気づかされた時、そのことを心から悔いていました。自分の過ちが愛する神様に泥を塗ってしまったことを深く悲しんで、そ

の罪と向き合おうとしていました。だからこそ、たとえ自分がどんなに大きな辱しめや痛みを味わうことになるうとも、その罪のもたらす結果さえも進んで受け入れていたのです。これが神のみこころに添って悲しんだ者の姿でした。

そして、これこそ今見ているコリントの兄弟姉妹たちが抱いていた悲しみでもあったのです。パウロから厳しく罪を戒められる手紙を受け取った彼らは、その手紙に対して正しく応答しました。かつては確かに頑なに罪を認めようともせずにパウロを拒絶していたコリントの人たちが、罪をはっきりと示された時に、それを心から嘆いて悔い改めていたのです。もう一度9節を見ると、「今は喜んでいます。あなたがたが悲しんだからではなく、あなたがたが悲しんで悔い改めたからです。あなたがたは神のみこころに添って悲しんだので、私たちのために何の害も受けなかったのです。」と書いていました。罪を正しく責められたコリントの教会は、心の中に悲しみを抱きました。でもこの悲しみは、単に後悔や心のとがめというもので終わることはありませんでした。この悲しみが神のみこころに添った悲しみであったからこそ、彼らのうちに悔い改めというものを、目に見える変化というものを生み出していたのです。

5. 聖さを生み出す真の悔い改め 10-11節

そして、きょう私たちが考えていきたい五つ目の要素は、この四つ目と密接に関わっています。壊れた関係を修復するための五つ目の要素は、聖さを生み出す真の悔い改めです。言いかえると、神のみこころに添った悲しみによって生じた悔い改めは、罪から離れて聖さを追い求める歩みを、その人物のうちに生み出すということです。そしてこれが、きょう私たちが考えるポイントになります。「真の悔い改め」というのは聖さを求める変えられた生き方を必ずその人物に生み出すということです。

これが実際どういうことなのかをきょうは10-11節のところから考えてみたいと思います。もう一度10-11節を、特に11節に注目しながら見てください。「:10 神のみこころに添った悲しみは、悔いのない、救いに至る悔い改めを生じさせますが、世の悲しみは死をもたらします。:11 ご覧なさい。神のみこころに添ったその悲しみが、あなたがたのうちに、どれほどの熱心を起こさせたことでしょうか。また、弁明、憤り、恐れ、慕う心、熱意を起こさせ、処罰を断行させたことでしょうか。あの問題について、あなたがたは、自分たちがすべての点で潔白であることを証明したのです。」と書いていました。

さて、これから私たちは11節を見ていくのですが、まず11節の最後に注目して見てください。パウロはコリントの教会を表す上で、「あの問題について、あなたがたは、自分たちがすべての点で潔白であることを証明したのです。」と記していました。ここで「潔白」ということばが使われていましたけれども、これにはもともと「純粹」や「聖い」、「無実の」といった意味が含まれています。つまり、パウロはここでもかつて頑なに罪を犯し続けていたコリントの兄弟姉妹たちが、以前とは変わって無実な者、潔白な者へと変えられていたのだと口にしていたのです。少し考えてみると、パウロは実際にコリントの人たちの歩みを直接見たわけではなく、テトスの報告を聞いただけでした。確かに彼は信頼するテトスからコリントの人たちが悲しんで悔い改めて、自分との関係を回復したいと強く望んでいるという知らせを聞いて大いに喜んでいました。以前にも見たように、彼らが悔い改めたという知らせを耳にした時、パウロは彼らを喜んで許す、そんな恵みの態度さえ持っていました。でも、一体どうしてパウロは彼らの悔い改めが本物であると確信することができたのでしょうか？考えてみれば、何度も何度も自分を裏切って、傷つけてきた者たちだったのです。彼らが今回は本当に変えられた、今回は本当に自分との交わりを回復したいと望んでいると、どうしてパウロははっきりとした確信を抱くことができたのでしょうか？それはパウロが、彼らのうちにある特徴を見て取ることができたからでした。パウロが彼らのうちに、神のみこころに添って悲しみ、真に悔い改めた者のうちに見られる七つの特徴を見出すことができたからでした。

●悔い改めた者に見られる七つの特徴：

では、その七つの特徴とは一体どのようなものだったのか？そのことを11節から一つ一つ見ていきたいと思います。そのことを見ていく上で、今、私たちは壊れた関係を修復するという事で、相手とのかをを考えていますけれども、「悔い改め」というものを考える上で、まずぜひ自分自身の悔い改めとみことばが教えている悔い改めを比べて、よく考えてみてください。果たして、私たちが持っている悔い改めはみことばが教えているものなのかどうかをよく考えてみてください。

1) 熱心さ

まず、悔い改めた者に見られる一つ目の特徴は「熱心さ」です。パウロは11節をこんなことばで始めていました。「ご覧なさい。神のみこころに添ったその悲しみが、あなたがたのうちに、どれほどの熱心を起こさせたことでしょうか。」と、悔い改めたコリントの人々のうちに起こっていたのは熱心さでした。これがすべての始まりだったのです。自分たちが間違っただ道に進んでいたことに気づかされた彼らは、その歩みから立ち返って、正しく歩んでいきたいという熱意にあふれていました。言いかえれば、過ちに気づいた彼らはそれをそのままよしとはしなかったということです。彼らは自分たちが間違っていると戒められた時に、それに気づいてそのまま見て見ぬふりをしたではありませんでした。過ちを正しく指摘された時に、その過ちを正したいと強く望んで、そのためであればどんな犠牲を払うこともいとわなかったのです。罪を示された時に、神様の前に喜ばれる正しいことは一体何ですかと。真に悔い改めた者というのは、罪から立ち返って神様の前を正しく歩むことを熱心に求めたのです。

そしてパウロは、まさにそんな姿をコリントの人々の中に見出すことができていました。以前にも見ましたが、パウロはコリントの教会に手紙を届けたテトスから、こんな報告を受けていたのです。7節の後半部分に「あなたがたが私を慕っていること、嘆き悲しんでいること、また私に対して熱意を持ってくれることを知らされて、私はますます喜びにあふれました。」と書いていました。コリントの兄弟姉妹たちは、自分たちが犯した罪を認めて、それを悲しんでいただけではなく、その問題や過ちをみずから進んで正しく扱おうという熱意を持っていたということです。確かに、当初は偽りの教師たちの声に耳を傾けて、福音から外れ、パウロを擁護することもなく拒んでいました。でもそれがいかに愚かなことだったのかということに気づいた後は、そこから変わろうとすること、正しいことをしようとするのを熱心に追い求めていたのです。その一つの例として挙げられるのは、あの公の場でパウロを非難した人物に対して課した教会戒規でした。2章で少し見ましたが、罪の中を歩んでいた時の彼らは、教会全体の前でパウロを辱めた者に対して、パウロのことを守ろうともしませんでした。でも、そのことを悔い改めた彼らは、その人物に戒規を施して教会から追い出したのです。彼らは正しいことをするという、神様の前に喜ばれることをするという、自分たちの間違っただ行動を正すということに熱心に向き合っていました。

さて、ここで自分の歩みを少し振り返ってみてください。ある人は悔い改めというものに関して、単に自分の中で考え方を考えるものだと捉えているかもしれません。確かに「悔い改め」ということば自体を考えてみても、主に新約で使われ、パウロがここでも使っていた“メタノイア”というギリシャ語は、「変える」という意味の“メタ”ということばと「考え」という意味の“ノエオ”という二つのことばから成り立っています。だからこそ悔い改めというのが、自分自身が罪を犯したことを認めて、それについて異なる考え方をするにしか過ぎないと考えている人もいたりするのです。罪を罪として認めて、私は間違っていましたと告白して、頭の中で考えを変えればそれで十分です、大丈夫ですと。もちろんこれらの態度が、全部が全部間違っているわけではありません。罪を認めて告白することも当然、私たちにとって重要なことです。

でも、果たしてそれがすべてなののでしょうか？悔い改めというものは、単に考えを変えるだけなののでしょうか？それともその中に罪から立ち返って正しく歩みたいという熱意を覚えていることも含まれるのでしょうか？もちろん含まれるのです。間違いを認めて、神様に喜ばれることをしたいとただ考え方

を変えるだけではなくて、それを追い求める熱心さが歩みのうちに明らかにされていることが求められるのです。少し考えてみてください。例えば、友人や兄弟姉妹によって罪を戒められたりした時に、また、自分自身が聖書を読んでいたり、メッセージを聞いたりして、過ちや罪に気づかされて心に責めを覚えた時に、果たして私たちはどのようにしてそのことに向き合おうとしているのでしょうか？単に間違っているということを認めて、考え方を変えるだけでしょうか？それとも間違っているということを認めて、それを主に告白して、そこから立ち返ることを熱心に求めることでしょうか？もちろんこのような悔い改めには難しさが伴うことを私たちはよく知っています。罪を認めて悔い改めるためには、私たちが自分の心で認めたくないことを認めなければならないということをわかっているからです。私たちは、自分が間違っているということを認めたくないのです。なぜ私たちが悔い改めるのが難しいかというと、それは自分ではないほかのだれかが正しいということを認めることになるからです。だれかによって罪が明らかにされた時、私たちのプライドは、それを否定することや、それから言い逃れすることに思いを向けさせることがあります。自分のしたことを認めたくないからこそ、ほかの人に責任をなすりつけたり、自分を正当化しようとするところがあるのです。自分が間違っていると認めたくないからこそ、私たちは別のところに目が向くように仕向けようとするのです。また、たとえ私たちが頭では間違っていると認めていたとしても、心がそれを認めていなければ、それを正そうとする熱心さは、行動には現れなかったりします。

マッカーサー先生は熱心さに関してこんなことを口にしていました。「そこには情熱があり、それを正そうとする動きがあり、熱心さがあるのです。それは、相手をおだてたり、叱ったり、押しつけたり、脅したり、命令したり、正しいことを無理にさせるような状況ではありません。何があろうとも熱心に、積極的に義を追求するのは、真の悔い改めの最も初期の反応なのです。あなたはその者たちを打ちのめす必要も、押しつける必要も、矯正する必要もありません。彼らが本物の悔い改めに至り、罪の深刻さを知るとき、そこには正しいことを追求したいという、文字通り抗うことのできない熱意が生まれるのです。」と。どう思います？罪を示された時に、真の悔い改めはそこから立ち返りたいという熱意を私たちの心に起こさせる。真に悔い改めた者は、自分が間違っていたと認めて、それを告白するだけではなく、そこで立ち止まるのではなく、その過ちを正したいとみずから積極的に聖さを追い求めようとするのです。そんな熱心さがあることが悔い改めた者に見られる一つ目の特徴でした。

2) 弁明

続けて二つ目に挙げられる特徴は弁明です。その後、「また、弁明」と続いていました。この「弁明」ということばには、もともと「防衛」や「守り」といった意味が含まれています。何かから守ること、防衛することです。そして、そこから「弁明する行為」といった意味で用いられることもあります。例えば、パウロはⅡテモテで「私の最初の弁明の際には、私を支持する者はだれもなく、みな私を見捨ててしまいました。」と、このことばが用いられていました。でもこの弁明ということばを聞いたなら、ある人は直ぐにこう思うかもしれません。先ほどコリントの人たちは正しいことを熱心に求めていたと、私たちは見ました。でも、結局は自分たちのことを弁明していたのですか？悔い改めたと言っていたけれども、やっぱり自分たちの正しさを訴えていたのですかと。もちろんそうではありませんでした。ここで弁明と言われているのは、何も彼らが自分たちは過ちや罪をいっさい犯していないのですと訴えていたのではなかったのです。そうではなく、彼らは自分たちがしたことを正しく正直に認めて告白し、もう自分たちがそのような者でなくなったこと、変えられたのだと弁明していたというのです。これが鍵になります。自分たちがしていたことを認めて告白し、もう自分たちがそのような者でなくなった、変えられたのだということを弁明していたと言うのです。

言いかえるのであれば、彼らはもう自分たちが罪を悔い改めて、間違った歩みから正しい歩みをする者へと変えられたのだということを証明しようとしていたということなのです。何のためにそんなことをして

いたと思います？それはそのようなあかしを立てることで、彼らが罪によって傷つけた関係や失われた信頼を回復することを熱心に求めていたからでした。彼らはそんなあかしを熱心に立てていたのです。自分たちのもとに手紙を持ってきたテトスをパウロのもとに送り返す時に、コリントの人たちは口々に言っていたでしょう、「テトスさん、どうか愛するパウロに伝えてください。私たちは変わったのです、かつてあなたをひどく傷つけてしまったことを許してください。今は以前のような者ではなくなったのです、変えられましたと。正しいことをしたいと願って今歩んでいますと。そんな私たちの歩みをどうか見てくださいと」。

ここで一つ私たちが覚えておきたいポイントがあります。それは犯した罪の深刻さに気づいて、それを悲しみ、悔い改めた者は、神様にだけそれを告白するのではなく、その罪に関わった者に対しても、自分が悔い改めて変えられたことをあかししようとするということです。この点において、私たちが模範とするべきひとりの人物を新約聖書の中に見て取ることができます。皆さんもよくご存じのザアカイがまさにそうでした。取税人のかしらであったザアカイは人々の嫌われ者でした。ただ、税金を集めるだけではなくて、人々をだまして、自分のためにより多くのお金を取り立てていたのです。盗人であって、嫌われ者だった彼のことを町の人々はだれも受け入れようとはしていませんでした。でも感謝なことに、すごいことに、そんな罪人であるザアカイのもとにもイエス様は来られて、あわれみによって彼に救いをお与えになったのです。さて、そのようにして救われたザアカイ。その後の人生はどうになりました？彼の生き方は変えられていました。罪を悔い改めて、彼はかつての生き方から立ち返ったのです。そして、神様の前に喜ばれることを追い求める者へと変えられた彼は、そのことを人々にもあかししようとしていました。だからルカ19：8で彼は「ところがザアカイは立って、主に言った。「主よ。ご覧ください。私の財産の半分を貧しい人たちに施します。また、だれからでも、私がだまし取った物は、四倍にして返します。」」と語っていたのです。心から悔い改めたザアカイは、自分の犯した罪を主の前に素直に認めただけではありませんでした。そこから立ち返ったことを町の人々にも明らかにしようとしていたのです。自分はもうかつての自分ではなくなったということを、彼を知っている者たちに知らせようとしていました。ザアカイにとってこれはもちろん容易ではなかったでしょう。彼は嫌われていたのです。彼はそうすることで、ひどいことばや扱いを自分が受けることになるかもしれないことはわかっていました。それでもなお、主が自分のことを救ってくださり、自分を変えてくださったということ、その喜びとすばらしさをあかししようとしていたのです。

果たして私たちはどうでしょう？自分の犯した罪を悔い改めて、そこから立ち返ったことを、生き方を通してあかしを立てることで弁明しようとしているのでしょうか？それとも自分の犯した罪を正当化して罪を犯さなければならなかったのだと、自分の正しさを弁明しようとしているのでしょうか？もし自分の犯した罪が、例えば悪いことばであったのであれば、今はそのようなことばを口から出すのではなく、人の徳を養うのに役立つことばを話す者として知られるように努めるのです。もし私たちの犯した罪がそしりや無慈悲であったのであれば、今はそのような態度を捨て去って、心の優しい許しを實踐する者として知られるように努めるのです。真に悔い改めた者は自分が間違っていたことを認めるだけではなく、その罪から立ち返り、正しさを追い求めている人物でした。でも、その正しさを求めているということを主だけではなく、自分に関わりがあった者に明らかにしようとするのです。神様だけではなく、その罪に関わった者に対して、自分の犯した罪に関わった者に対しても自分が変えられたというあかしを立てようとしていたのです。そしてそんな弁明があることが悔い改めた者に見られる二つ目の特徴でした。

3) 憤り

三つ目に悔い改めた者の特徴として挙げられるものは、憤りでした。コリントの人々は自分たちの罪によってパウロを傷つけて、神様の栄光を汚してしまったことを悔やんで腹を立てていました。彼らは

自分たちの犯した過ちに対して、正しい怒りを燃やして、以前のふるまいを忌み嫌っていたのです。当初コリントの教会はにせ教師たちのうそを信じて、パウロに関する誤った考え方をしていました。自分たちに対してすべてを捧げ、愛を示してくれたパウロに疑いを抱いて、彼を辱めるような行為を繰り返していたのです。また、何よりも彼らはパウロから託されていたキリストの福音をコリントの町であかしするという責任を負っていたにもかかわらず、その福音を捨てて、偽りの教師たちの教えに耳を傾けていたのです。その罪に気づかされた時に、彼らは自分たちのしてきたことの深刻な問題さに心を碎かれました。自分たちは一体何ということしたのだ、パウロに対して何と不誠実で愚かなことをしてしまったのだと。ましてや福音を捨てて、本来神様のすばらしさをあかしする者なのに、何というあかしを人々の前で立てていたのだと。気づいたその罪に対して、彼らは応答として燃える怒りを、正しい怒りを覚えていたのです。

言いかえると、罪のもたらす深刻な結果に気づかされた者たちは、自分たちの罪を軽く扱おうとはしなかったということです。彼らは自分たちの罪を肯定したり、大した問題ではないと甘く考えることもしていませんでした。悔い改めた彼らは、何よりも神様とのみことばを愛していたからこそ、神様が忌み嫌われるその罪を、同じように忌み嫌う者として歩んでいこうとしていたのです。この悪を憎むということに関しては、みことばは別の箇所でも教えてくれていました。例えば、詩篇 97 : 10 には「【主】を愛する者たちよ。悪を憎め。主は聖徒たちのいのちを守り、悪者どもの手から、彼らを救い出される。」、また詩篇 119 : 104 には、「私には、あなたの戒めがあるので、わきまえがあります。それゆえ、私は偽りの道をことごとく憎みます。」とあります。これはもちろん、旧約の信仰者たちやコリントの兄弟姉妹にだけでなく、今の私たちに対しても神様が求めておられることでした。神様を愛するがゆえに、自分のうちにある罪深さをますます忌み嫌う者へとになっていくことが私たちにとっても大切になるのです。

だとすれば、私たちはどうでしょう？自分たちの罪に対して憤りを覚えて、それを脱ぎ捨てようとしているのでしょうか？それとも自分のうちにある罪を、大した問題ではないと考えて、それから立ち返ることに必要性を感じていなかったり、聖さを追い求めることに対して熱心さを失ってはいないでしょうか？真に悔い改めた者は、自分が犯した罪がいかに神様の前に深刻であるかをわかっていたからこそ、その罪に対して憤り、そこからどうにかして立ち返りたいと願う者でした。もし私たちが自分自身の罪を正しく見られていないのであれば、私たちが自分自身に問いかけるべき質問はこれです。私たちは実際、神様が見るように自分の罪を見ているだろうか、私たちは神様が罪に対して怒っておられるように、自分の罪に対して怒っているだろうかということです。私たちの神様は聖い神様でした。罪をいっさい受けつけない、罪に対して怒っているお方でした。その神を愛する者として、私たちは生かされているのです。罪に対する憤りがあるということが悔い改めた者に見られる三つ目の特徴でした。

4) 恐れ

四つ目に、悔い改めた者の特徴として挙げられるものは恐れです。悔い改めたコリントの人々の中には恐れというものが生じていました。一体この恐れというのは、何に対してのものだったのでしょうか？少なくとも二つのものを挙げるができるかと思えます。

①自分自身の弱さに対する恐れ

一つは、自分自身の肉の弱さのために罪を繰り返し犯してしまうのではないかということに対する恐れです。もちろん、これまでも見てきたように、悔い改めた心というのは、主の前に正しいことを熱心に追い求めようとするからこそ、再び罪を犯したいなどと思いはしません。でも同時に、自分の弱さや愚かさを知っているからこそ、自分自身が誘惑に負けて罪に陥ってしまうことがあることをわかっていて、そのことを恐れているのです。私たちも同じようなことはありません？罪のもたらす大きな影響を覚えているからこそ、そのことを忌み嫌って、そこから離れたいと強く願っている一方で、悲しいこ

とに罪に容易に負けてしまう弱さを抱えていることを覚えているのです。だからこそ、そのようにして罪に陥ってしまわないかと恐れを抱いてしまったりするのです。だからこそ私たちにはどんな時も神様のみことばの助けが欠かせないものであるということと言うまでもありません。

②神に対する恐れ

でもここでコリントの兄弟姉妹たちが抱いていた恐れというのは、そんな恐れ以上に神様に対する恐れ、神様に対する畏敬の念というものを彼らは覚えていたのです。同じ7：1にも、「愛する者たち。私たちはこのような約束を与えられているのですから、いっさいの霊肉の汚れから自分をきよめ、神を恐れかしこんで聖きを全うしようではありませんか。」と記されていました。この神様に対して抱く恐れというものの、それこそ、それを抱く者のうちに聖さを生み出すのです。これは先ほど見た憤りと大きく関連しているのですけれども、神様を恐れる者というのは、愛する神様を悲しませたくないからこそ、罪を忌み嫌って、そこから立ち返り、聖さを追い求めようとするのです。

この主を恐れるということに関して、みことばはいろいろな場所で教えていました。箴言の著者も箴言8：13で「【主】を恐れることは悪を憎むことである。」と述べています。また、ソロモンも伝道者の書の最後12：13－14に「：13 結局のところ、もうすべてが聞かされていることだ。神を恐れよ。神の命令を守れ。これが人間にとってすべてである。：14 神は、善であれ悪であれ、すべての隠れたことについて、すべてのわざをさばかれるからだ。」とまとめていました。こうしてみことばは私たちに繰り返し教えてくれたのです。私たちが主を恐れて悪から離れていくことは主から託されている命令であり、私たちはそれぞれ主の前に選択しなければいけないのです。自分自身のうちに罪を見出す時に、だれかに罪を明らかにされる時に、それでもなお頑なにそれらと向き合おうとはせずに、罪の中を歩み続けるのか、それともすべてを正しくさばかれる主を恐れるからこそ、この方を悲しませたくないからこそ、悔い改めて悪を離れ、聖さを追い求めようとするのか——。果たして私たちはどちらを選択するのでしょうか？真に悔い改めた者は、自分の愛する神様を悲しませたくないという恐れを抱いているからこそ、罪を憎んで、そこから離れて聖さを追い求める者でした。そんな恐れこそ悔い改めた者に見られる四つ目の特徴なのです。

5) 慕う心

五つ目に悔い改めた者の特徴として挙げられるものは、慕う心でした。このことに関しては、以前見た7節で触れたことの繰り返しにもなるのですが、罪を悔い改めたコリントの人たちは、パウロのことを慕って彼と再会することを心から望んでいたのです。確かに、彼らはかつてパウロが訪問して来たことを喜ばずに、彼の指摘を受け入れなかったばかりか非難して追い返しました。その扱いが余りにもひどいものであったからこそ、パウロはもう二度と彼らを訪問したくないと思うほどの深い傷を心に負っていたのです。でもそのひどいふるまいが間違っていたことに気づかされて、その罪に気づかされて悔い改めた時に、彼らの心は変えられました。彼らは自分たちが深く傷つけたパウロに再び会って、許されるのであれば、その壊れた関係を修復したいと強く願うようになっていたのです。ですから真に悔い改めた者というのは、自分が罪を犯して傷つけた相手との壊れた関係を、熱心に築き直したいという願いを持っている者のことでした。そのような慕う心があること、これが悔い改めた者に見られる五つ目の特徴だったのです。

6) 熱意

続く六つ目の特徴は、今見た五つ目とも深く関連しているものになります。六つ目は熱意です。神のみこころに添って悲しみ、悔い改めたコリントの兄弟姉妹のうちには熱意が生じていたのです。一体この熱意は何に対する熱意だったのでしょうか？もちろん、一つ目の熱心さでも触れたように、彼らの心のうちには間違いなく自分たちのうちから罪を取り除きたいという熱意が生まれてはいました。砕かれた彼らは神様を愛する者として歩んでいきたいと心から望んでいたがゆえに、悪はどんな悪であろうと

も、そこから離れて歩んでいきたいと願って生きていたのです。たとえどんな犠牲を払うことになっても、どんな犠牲を伴うことになろうとも正しい道を、神様に喜ばれる道を忠実に歩もうと、そう追い求めていたのです。神様に対するその熱意はその人のうちに義に対する深い情熱を芽生えさせるものでした。

この熱意というのは、そこでとどまるものでもありませんでした。コリントの人たちは、神様に対して熱意を覚えていただけでなく、パウロに対しても熱意を覚えていたのです。これも以前少し見ましたけれども、ここと同じ熱意ということばが7節でも「また私に対して熱意を持っていてくれることを知らされて、私はますます喜びにあふれました。」と使われていました。つまりコリントの人たちは、パウロに再び会って壊れた関係を修復することを望んで、そのためであれば、どんな犠牲を払うことさえいとわない、そんな熱意を持っていたのです。彼らは自分たちの罪が引き起こした結果を素直に受け入れていました。自分たちがパウロのことをひどく傷つけたことを理解して、そのことを認めていました。そして、そのことを心から悔い改めた彼らは、自分たちが壊してしまったパウロとの関係を回復するために、自分たちにできるすべてのことをなそうとしたのです。

そしてこれは私たちにとっても非常に大切なことになります。自分のこととして考えてみてください。例えば私たちが自分自身の罪で、だれかを傷つけてしまった時に、果たして私たちはその相手に対してみずから進んで自分にできることをすべてして、その関係を修復しようとしているでしょうか？パウロはこんなことばをローマ12：18に残していました。「あなたがたは、自分に限る限り、すべての人と平和を保ちなさい。」と、はっきりと言われていました。つまり私たちには相手がどのように応答するかはわかりません。たとえ心から自分のしたことを悔いて、罪を犯した相手のところに行って、和解を求めたとしても、相手はそれをすぐに受け入れることができないこともあります。受けた傷が、大きければ、大きいほど相手はすぐに平和を築くことに難しさを覚えることもあったりするのです。でもたとえ相手がどうであろうとも、私たちは自分自身にできるすべてのことをして、その相手との平和を築くことを追い求めることが求められていました。相手がどうであれ、神様が求めていることを私たち自身が喜んでなして行くことが重要だったのです。真に悔い改めた者は、自分にできることはすべてなして壊れた関係を修復しようと熱心に願う者でした。その熱意があることが悔い改めた者に見られる六つ目の特徴でした。

7) 処罰を断行させた

そして最後の七つ目に悔い改めた者に見られる特徴として挙げられるものは処罰を断行させたということです。言いかえるのであれば、これは罪や過ちに対して正しい処罰がなされることを望む態度だということです。もっと言えば、これは罪の結果から逃げるのではなく、罪によってもたらされる罰を避けるのではなく、自分の犯した罪の結果だとみずから進んで受け入れるということです。これがどういうふうにならぬに当てはまるか、少し考えてみてください。例えばある人がだれかに罪を責められたことによって、その時には悲しみを覚えて、自分のしたことは間違っていました、すみませんと口にはするかもしれませんが、しかし、そこに何かしらの罪の結果や処罰が伴うことを聞かされれば、自分を守るために言い訳したり、自分のしたことを正当化し始めるかもしれません。そしてそのような自分を守ろうとする態度は、みことばから見た時に、処罰を断行させる主の真の悔い改めではないということです。神のみこころに添って悲しんで、本当に悔い改めた者というのは、自分の犯した間違いに対して、正しい判断や正しい正義が下される時、それを自分のこととして素直に認めようとするということです。

ですから、間違っていることをだれかから指摘されて、その過ちが明らかにされれば、私は罪を犯しました、どうしたらこの問題を正すことができるでしょうか？そう願って、たとえそこに厳しい罰が伴うことであろうとも、自分は罪を犯しました、それに当然値しますとへりくだって、その罰を受け入れ

ようとするということです。コリントの兄弟姉妹たちがまさにそうでした。これまでも見てきたように、彼らは自分たちの正しさを弁護しようとするのでも、不満を口にしてつぶやいたり、言い争ってどうにか自分の犯した罪の罰から抜け出す方法を見出そうとしていたのでもありませんでした。彼らは真に悔い改めていたからこそ、罪の結果、どのようなものがもたらされることになろうとも、それさえも神様の前に必要なこととして認めていたのです。

そして、この点においても、私たちは聖書の中に、具体的な例を見て取ることができます。皆さんも良く知っているあの放蕩息子がまさにそうでした。ルカ 15 章にその話が記されています。どんな内容だったかという、二人の息子のうちの弟の方が父親のところに行って、私の財産の分け前を下さいと訴えたのです。そしてそれを受け取った彼は遠い国へと旅立って行きました。そしてそこで放蕩して湯水のように財産を使い果たしてしまうのです。何もかも使い果たした後、彼はある人のもとに身を寄せて、豚の世話をすることになります。彼には食べる物もありませんでした。しかし、そんな時に彼は我に返って罪を心から悔い改めることになるのです。その場面がルカ 15 : 17 - 19 に記されていました。「:17 しかし、我に返ったとき彼は、こう言った。『父のところには、パンのあり余っている雇い人が大ぜいいるではないか。それなのに、私はここで、飢え死にしそうだ。:18 立って、父のところに行って、こう言おう。「お父さん。私は天に対して罪を犯し、またあなたの前に罪を犯しました。:19 もう私は、あなたの子と呼ばれる資格はありません。雇い人のひとりにしてください。』」と。放蕩息子の悔い改めは真実のものでした。なぜそれがわかるのかという、それは彼が神様と父親に対して犯した罪を素直に認めていたからだけでなく、彼自身がその罪の結果をみずから受け入れていたからでした。罪を告白した彼は、ここで、自分の父の家に帰ってもう一度息子としてやり直させてもらおう、かつて自分自身が持っていた息子としての特権を再び返してもらおう、数カ月は雇い人でも、その後は息子に戻してもらおう、そんなことは一言も言っていないでいました。自分の犯した罪に心を砕かれていた彼は、「もう私は、あなたの子と呼ばれる資格はありません。雇い人のひとりにしてください」と告げようと心に決め、父にそう告げるのです。彼は自分が当然受けるべき罪の罰を拒否して拒むことはありませんでした。その罰を自分のこととしてただ受け入れていたのです。彼の心には真の悔い改めが与えられていました。そして、そんな者に対して、そこには赦しというものが存在していたのです。そのことは後を読めばわかります。

だとすれば、私たちはどうでしょうか？罪が明らかにされた時に、それがどんな結果を伴うことになろうとも、へりくだって自分が過ちを犯したことを認めようとするのでしょうか？それに伴う罰でさえも自分の罪の結果だからと、みずから進んで受け入れようとするのでしょうか？それとも自分の罪を否定したり、ほかのだれかに責任をなすりつけることで、自分自身を守ることを何よりも考えてはいないのでしょうか？大きな結果が伴うのであれば、罪を認めるのではなくて、罪を犯し続けることを選択してはいないのでしょうか？また、もっと言えば、自分の罪を戒め、自分の罪を明らかにした者に対してねたんだり、苦い思いを持ち続けたりはしていないのでしょうか？真に悔い改めた者は、そこに厳しい結果が伴うことであろうとも、みずから進んでそれを受け入れる者でした。間違ったことに対して、正しい処罰がなされることを望む者でした。そんな態度こそ悔い改めた者に見られる七つ目の特徴だったのです。

〇まとめ

さて、ここまで真に悔い改めた者に見られる七つの特徴を学んできたのですけれども、どうでしょうか？神のみこころに添って悲しんだコリントの教会は、聖さを生み出す真の悔い改めへと至っていました。そしてそんな彼らの生き方は変えられていたのです。最初に見た 11 節の最後に「**あの問題について、あなたがたは、自分たちがすべての点で潔白であることを証明したのです。**」と書いていました。彼らは心を砕かれました。罪から立ち返りました。だからこそ、彼らは熱心さにおいても、弁明においても、憤りにおいても、恐れにおいても、慕う心においても、熱意においても、そして処罰においても、それらすべての点において自分たちが罪から立ち返ったこと、そして聖さを追い求める者へと変えられたこ

とを明らかにしようとしていたのです。そしてパウロはそれを知っていたからこそ、そのことを大いに喜んでいました。

では、私たち自身の悔い改めはどうでしょう？果たしてきょう私たちがともに見てきたこの悔い改めの特徴は、私たちのうちに見られるものでしょうか？もちろん、私たちにはまだまだ欠けている部分、成長しなければならぬ部分がみなそれぞれにあります。本当に神様が見るように罪を見て、それに対して憤りや怒り、恐れを覚えているのか？どれほど自分自身の罪に対して深刻に、真剣に向き合っているのか、その深刻さを理解しているのか、本当に熱心さにあふれてどんな犠牲を払うことがあろうとも、どんな結果を伴うことであろうとも、神様に喜ばれる聖さを、神様に喜ばれる正しい生き方を追い求めていこうとしているのか？こうしてみことばの基準を目の当たりにする時に、その基準からかけ離れている自分の姿に気づくでしょう。でも皆さん、覚えていなければいけないのは、これが私たちに対して神様が求めておられることでした。もちろん、私たち自身の力では何もできません。しかし神様は助け手としての御霊を、どんな時も基盤となるそのみことばを私たちに与えてくださっているのです。

確かに今私たちが見てきたことは、非常に厳しいことだったでしょう。でも同時に、感謝だとも思いません？かつて私たちはキリストに似た者になりたいたいなどとはいっさい思わずに、罪の中に死んで、神の御怒りを受けるべき子とした歩んでいたのです。でもそんな私たちが今はキリストによって救われて、確かに罪との戦いを日々経験しながらも、死に勝利された主とともに歩むことができ、そしていつか救い主であるイエス・キリストにお会いする日がやって来るという希望を持って歩み続けることができるのです。そのような者として変えられました。だとすれば、私たちは私たちに与えられている責任を果たすことが求められるのです。地上で残されている日は、いつまでか、私たちにはわかりません。でも必ず主にお会いする日はやって来るのです。その日を楽しみにしながら、罪を見るのであれば心からそれを悔い改めて、そして聖さを追い求め、義の栄冠をいただくその日を、その目標を目指してともに歩み続けていきましょう。

一言祈る前に、もしきょう私たちが見たこのみことばで、自分自身の悔い改めを考えさせられたのであれば、自分自身の救いを考えさせられたのであれば、ぜひ帰る前に、私や長老、ほかのだれでもいいですから、人に話して、みことばをしっかりと理解してから帰るようにしてください。このみことばが皆さんの励ましになることを心から祈っています。